

## 個人研修報告 in Scotland



社会福祉法人飛鳥学院 児童養護施設飛鳥学院  
児童指導員 竹島隆二

4カ国目は…とその前に、私も勉強不足で行くまではあまり知らなかつたのですが…。そもそも私たちの認識しているイギリスは正式には「United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)」と言われ、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドという歴史的経緯に基づく4つの国から形成されている連合王国なのを知っていましたか？イギリスと言えどもこの4つの地域によって政策は大きく異なります。そう4カ国目は、この中でも施設養護を残しながら里親中心の社会的養護政策を行っているスコットランドへ、私は今後の日本の社会的養護の方向性のヒントを探しに向かいました。

### 1. ソーシャルペタゴジーについて ～クリスティン・スパーク氏～ 【ミッドロージアン市】

スコットランドの初日はソーシャルペタゴジーについての講義をクリスティン・スパーク氏(ミッドロージアンの教育担当者)より受けた。ソーシャルペタゴジーとは「社会における(子育て)支援」と訳するのが一番近いように感じる。我々、施設職員の普段の実践・支援の裏付けがソーシャルペタゴジーの理論とリンクすることを改めて感じた。子育てに関して言えば施設養育はもちろんのこと福祉・教育・保育・心理といった枠組みを超えた非常に広い視野を持った支援の考え方であるが、もはや子育てだけでなく介護や障害者へもすでにソーシャルペタゴジーの考え方で支援はされており本当に幅広い支援において共通のプラットフォームを与えてくれるものであろう。ごく一部だが特徴として下記に記す。



- ・子どもや支援者をひとりの全人的な存在として捉え、一方向の知の授受ではなく相互作用の中で行われる個性・アイデンティティ・共同性の獲得を支援する。
- ・自らを専門職としての役割にとどまらないひとりの人間としての意識。
- ・スイスの教育実践家であるペスタロッチの言葉で「頭で考え、心で感じ、手を動かす」という知的・実践的・情緒的な支援を意識する。
- ・子ども集団、職員と子どもといったグループを積極的に活用していく。

### 2. サラさん・ジェマさん ～里親 SW～

里親 SW のサラさんとジェマさんにスコットランドにおける里親支援について話を聞いた。スコットランドにおいては社会的養護における里親への委託率は90%である。その為、里親になるに当たっての調査やトレーニング、なってからもトレーニング、そしてサポートが充実している。また、日本で言う一時保護も里親が行う。最近ではキンシップケアと言われ、日本では「親族里親」と訳される里親が多いが、スコットランドにおいては実際に親族に限らず友人の家族などでも法律で認められている。里親希望者はまずバックグラウンド(犯罪歴、経済状況、成育歴等)調査を受け、トレーニングを受けるのだが、バックグラウンド調査をととも慎重に行っており、トータルで里親登録に至るまでには約1年かかるのが通常である。その後も定期的にSVQ(Scottish Vocational Qualification)という各分野における国家の基準がありそれをベースに研修等を実施している。しかし一番力を入れてるのはサポートだと話をされていた。委託を受けても不調等でドリフトすることも多々あり、子どもだけでなく里親も自分を責めメンタル不調を起こすことがあるので、トレーニングの段階からそれを重視し不調を経験された里親から話を受けて、その里親にいたからこそプラスになったことなどをあらゆる支援者から伝えることもしているとのこと。SWは里親と一緒に歩いていくという意識を忘れないようにしているとのこと。

### 3. ①「Woodburn Court」 ②「Lady Brae」 ～公立の児童養護施設(ミッドロージアン)～

#### ③Nether Johnstone House ④Harmeny School ⑤Sycamore project ～民間の児童養護施設～

ミッドロージアンは公立で運営している児童養護施設を2つ持っており、そこを(①、②)見学しスタッフの方たちと支援について話をした。また民間では3つの施設を見学や実習させて頂いた。前述した通りスコットランドは里親委託が90%である為、10%の施設養育においては小規模ケアしかない。社会的養護が必要な子(スコットランドでは「Looked after children」と呼びここには在宅指導の子どもも含まれる)は第一の選択肢は里親ケアで、里親ではうまくいかない子が施設へ入所する。入所児童のケースとしてはネグレクト、性的虐待等で大きなトラウマを抱えている子が多い。またADHD等の発達障害を抱えている子も多く、困難なケースがほとんどだ。その為スタッフの人数基準も多く、日本とは逆で子どもより大人(スタッフ)の方が多い。この状況から施設におけるケアはとてもスペシャルなニーズを抱えるケースが多くそれに対応できるように考えられていることがわかる。施設の基本は男女混合で高学年は自分の部屋にトイレもシャワーもついている。TVや冷蔵庫も居室にあるのはごく普通である。③の施設に



はネグレクト等でかなりのトラウマがあり1身体的に異常はないがしゃべれない16歳の男の子がいた。その為マカトンを使ってコミュニケーションをとっているとのこと。④は特別にケアが必要な子どもが入所する施設で、敷地内に学校も併設されており、日本でいうところの児童心理治療施設と児童養護施設がくっついたような施設である。スコットランドにはこのような形態の施設をレジデンシャル・スクールと呼び3つしかなくそのうちの1つである。スコットランド全土の地方自治体から6歳～18歳の合計20名の子ども達を受け入れ5つのホームで生活し敷地内の学校に通っている。入所児の背景として多くは、幼い頃からケアを受けており、その複雑なニーズの為に、来るまでに何度も保護施設での崩壊を経験していることが多い。

私は④の施設に宿泊をさせて頂きながら実習をさせて頂いた。そこで感じたのは穏やかさだ。学校は小学生部と中学生部に分かれており、3～5人が1クラスで先生(スタッフ)も3～4人いる。前述の通りかなり落ち着くことが難しい子等も相当数いるが、学校でもコテージでも個々に対応できるだけのスタッフがいる為、全体の雰囲気は比較的穏やかであった。他の施設でも子どもとの関りを聞く中で「一緒に」や「寄り添う」というワードが多く出ており、言うのは簡単でもなかなか難しいことだと思ったが、ここで実習をして現場に入ることによってそれを体感することができた。また、たくさんの施設のスタッフの方達と話す中で特に大事にしているのは食事の時間だという。家庭にいた時にトラブルが起きるのはスコットランドは食事時間が多い。それは親のケンカであったり自分への暴力、そして多いのは食事を取られるという罰。その為、食事に対するトラウマを抱える子どもが非常に多い。なので食事は楽しい時間だというふうに記憶を塗り替えてあげることに力を入れているとのこと。

私が思ったのは、確かにスタッフの人数が多いと支援に幅やゆとりが出るがそれ以上に支援の基礎となる考え方にソーシャルペタゴジーがあるのだろうと感じた。それがあって初めて共通の支援の方向性を認識しスタッフの役割分担が上手に行われ、結果として私が感じた「穏やかさ」につながっているのだろう。今の日本の社会的養護の現場を惑わせている「家庭的」という言葉をこのようなワードに代えてみるともっとクリアになるのではないかと思うスコットランド研修であった。



④の学校の教室



# 番外編

Part. 4

いよいよ最後かな…

スコットランドと言えばまずはウイスキー！あと、ハリーポッターとか、城とか、セルティックも有名ですね～ それから、それからマッキントッシュやら頭にコーン被った銅像も有名ですよ～ よし！行こう！そして、なんとここスコットランドでは今野さんと1日だけ日程が被り久しぶりに感動の再会！！



ウイスキーショップ&蒸留所



エジンバラ城にて  
戦友と感動の再会



コーン被った銅像たち



施設スタッフ Craig と朝 RUN したりスポーツバー行ったり仲よし(^^)



## とてつもなくお世話になった方たち



スコットランド研修をコーディネートしてくれた

**イアン先生！**

と

**最高の通訳の方達！**

